芸術は糧、自分を見失わないために——香月人美

かづき・ひとみ　朗読者/ギャラリスト。1958年福岡県生まれ。90年福岡市に「海の見える世界－小さなギャラリー」をオープン。91年画廊香月開設。97年より舞台芸術・制作上演活動に入る。2011年画廊香月を銀座に開設。東京都在住。

information　10/8と11/4にさいたま国際芸術祭2023 埼玉会館「エスプラナード展/今とわたし」《香月人美／詩的実験》を上演予定

高島進「Drawing for pencil sharpener, colored pencils and canvas」2023年　53×58.5cm

AFAFファウンダータ・森田俊一郎と画廊香月・香月人美が共同出展。香月はかつて福岡で森田とともに「画廊香月」を経営したが、表現者として突き進むために京都、そして東京へと出た。二人にこれまでの歩みと芸術とは何かを問う。

芸術とギャラリスト

——おふたりのギャラリーはどのように始まったのでしょうか。

森田　1991年、香月と福岡市中央区赤坂のけやき通りに「画廊香月」をオープンしました。アーティストが生み出した作品を紹介するということは、それまで培った商社での仕事とは全く違い驚きの連続でした。

香月　当時はいろいろな人々が唄い笑うオペラのようでした。ピアノのある空間は画家や音楽家、詩人、舞台作家、映画監督などあらゆる人々の交流する芸術サロンでした。ラジオ中継やCD制作など、お客さまやメディアも巻き込んで好奇心全開でしたね。

森田　私は開廊前、パリのギャラリーを回りました。当時の画廊にはさりげなくユトリロやキスリングなどが並んでいたけれど、どうもピンとこなかった。唯一いいと思ったのがバスキアだと知ったのは数年経ってからです。彼に関わる人々が動き、バスキアという価値を高めた。それを目の当たりにして、「アートには奇跡が起こる」ことを知りました。

当時、彼の作品は、私の退職金などを合算したら買えるくらいでした。でも、私にはそれまでの自分を超えるだけの器量がなかった。感動する作品と出会うことは、剥き出しの自分を受け入れること。ギャラリーを訪れる人たちに、そんな自分自身を掴み取ってもらいたいと過剰に期待してしまう私がいます。

ギャラリーは劇場、作品は物言わぬアクター、私はそこに佇む演出家

香月　ギャラリストは作家のプロデューサーでマネージャー。画廊香月をオープンして感性のおもむくままに突っ走って5、6年経過した頃でした。私はその頃、方向性を見失いはじめていました。ある日、同じことばが声の音や響きで全く意味もニュアンスも違ってからだに入ってきて、声はからだを持っていると気づいたんです。未だ一度も経験したことのない感覚でした。私のなかのエイリアン（表現欲求）がからだを突き破って出現する、今起きていることの全てを知りたいと思いました。ギャラリーを跳び出すしかなかった。

森田　香月はギャラリストであると同時に表現者なのです。それが大きくなったのだと思います。表現は上っ面な技術ではなく生き方そのものです。芸術が持つ創造性に触れ、魂が揺さぶられるほどの感動を享受し、それを情熱を持って人に伝えるギャラリスト。芸術家としての彼女の才能に気づきました。

香月　空間は創造し合う関係が生み出すもの、それ故に私の身体です。そこでは芸術と呼ばれるものは、作家の作品のなかにあるのでもなく、オーナーの側にあるのでもなく、互いの眼差しの交わるところにあります。私はそれをギャラリーと呼んできました。

Booth No. N29

ギャラリーモリタ＋画廊香月

出逢いは偉大なる芸術である

森田俊一郎×香月人美

（AFAFファウンダー）

アートを介して「時代を作る」——森田俊一郎

もりた・しゅんいちろう　ギャラリスト。1954年神奈川県生まれ。10年にわたる商社マン生活にピリオドを打ち、91年画廊香月開設。2005年ギャラリーモリタに改称。地域や企業、団体のプロモーションやブランディングにも数多く関わる。AFAF理事。福岡県在住。

鳥越一輝「don't」2023年　ミクストメディア　100号F

舞踏家・大野一雄との出逢い

香月　福岡を出て、京都、東京と新しい土地で身体の入れ替えが始まった。京都芸術センター支援事業では芸術家としての場が与えられ、舞台芸術の制作と上演活動に入った。大野一雄が歩く、片手を挙げる、その踊りに百年の歴史を見る。本物の芸術だった。海外のアクターやダンサーと鳥や蝶、花、生きとし生けるものに変貌し、命のありったけを叫ぶ《声》はからだを持ち、《身振り》は踊りとなった。

芸術は糧、自分を見失わないために

香月　私は芸術を壁の染みから学びました。刻一刻と移ろいゆく雲からは、無限に変化する力を学びました。光を食べる植物からは、暗い地中に根を下ろしていく勇気を学びました。それらひとつひとつの自然の力が生きている場所を《芸術の野原》と呼ぶことにしています。この場所は各自のあるがままの存在が問われるところなのです。

森田　芸術は答えがひとつでないから面白いんだよね。今の日本は似たりよったりの表層的な表現ばかりで私利私欲を競い合い、芸術とエンタメの差がほとんどない気がする。アートは内面に降りていく力であるはずなのに。

平松宇造「Swaying to Blue」2022年
墨、顔料、キャンバス　96×80cm

出逢いは偉大なる芸術である

森田　私にとって重要なのは、アートを介して「時代を作る」ということです。そんな日常では気恥ずかしいようなことでも、アートだとできるように思えちゃう。だからこそ私を圧倒するほど感動させてくれるアートを求めているのです。

香月　感動は傷口に似ている。もう昨日までのその人ではないから。それが起こせるかどうか。

——今回、九州派を筆頭にシーズン・ラオや鳥越一輝、平松宇造や高島進など、楽しみですね。

森田　海外のアートフェアに行って、国境を超えて同じ価値を認め合う人たちが情報を共有し、交流を深め合っているシーンを見て羨ましく思っていました。大事なことは既存の価値観に囚われることなく、自分の信じる直感力を打ち出せることです。堂々と賛同者、いや共犯者を募ることもできる。もし直感力が間違っていなかったら、時代に大きな楔を打ち込むことだってできるかもしれない。これこそアートの面白さです。

■ GALLERY DATA

ギャラリーモリタ　福岡市中央区赤坂3-9-28　Tel. 092-716-1032　https://g-morita.com
画廊香月　中央区銀座1-9-8 奥野ビル605　Tel. 03-5579-9617　https://g-kazuki.com